

III

カナダの経験を踏まえて

「子供の目の高さ」での日本語教育を

村澤 晃

ある日本語学校の校長先生からいただいた年賀カードに「日本での教員資格を持つある教師のクラスの生徒たちが、日本語の勉強をやめる、と言ってきたので困っている。」と書かれていました。「日本で日本語教師をしていた人に担当させたら4～8時間後に生徒数が半減した」、という話を聞いたこともあります。これらのことから考えられることは、日本語学習の生徒たちが変わりつつあること、カリキュラムに則しての詰め込み教育は、生徒たちに受け入れられないということです。多様化している日本語学習者のニーズを可能なかぎり把握し、動機づけ・目的意識を明確にさせることや、あれもこれもと教え込まないこと、教師と生徒の信頼関係を確立すること、等が求められていることを知るべきではないかと思います。

1. 教える相手を知らない授業は成立しない

日系の家庭でも日本語を使っていない家庭が増えていきます。「継承語」として日本語を身につけてほしいという親のモチベーションで生徒たちは、アフタースクールや土曜クラスに送り込まれているのが殆どではないでしょうか。キンダークラス、レベル1～2ぐらいまでは、日系の友だちと遊ぶことを楽しみにして来ますが、習いごとやスポーツに興味を持ち出す頃になると、宿題が重荷になり、日本語が上達しなくなる、などのストレスが日本語学校を遠ざけるようにするのではないのでしょうか。教師が熱心に指導しようとする程、生徒との距離は遠くなってしまいます。最低、次のことを把握し、対応したいものです。

(1) 日本語能力の程度

日本語能力の習得率は、家庭での日本語の使用頻度によることは言うまでもありません。しかし、その実情を正確につかむことは出来ません。パブリック・スクールでは英語で生活しているので、日本語を使う機会は殆どなくなります。全く日本語は初めてという生徒もいるでしょう。したがって、同じクラスの中でも日本語能力のギャップは、さまざまと言えます。会話が出来るといってもその差は大きいと思います。それぞれの現在の日本語能力からスタートするわけですから、教師の指導能力が問われることとなります。興味を持続させ、学ぶ意欲を向上させるにはどうしたらよいかを考え、工夫しなければなりません。

(2) 日本語を学ぶ目的・目標

日本の祖父母・知人と手紙のやりとりをしたいとか、プラモデルや電気機器の説明書が読めるようになりたい、などの目的を持っている場合は、読み書きの能力を高めるようにシラバスを考え、とにかく日本語を話せるようになりたい、という場合は場面設定をし、タスクを多く取り入れ、コミュニケーション・アプローチがいいようです。クラスの人数が少ない場合は個人差に応じた指導法を取り入れて、ということが効率的のようです。いずれにしても、大人対象のオーディオ・リンガル方式だけでは、記憶中心になり、生徒たちは興味を失うこととなります。生徒のニーズを少しでも満足させる授業を展開しなければならないわけです。生徒の学ぶ目的や日本語能力を確かめながらステップを調整し、授業を通して学ぶ意欲をかきたて、充足感を持たせるアイデアが必要なのです。

2. 「子どもの目の高さ」での授業を

日本語を学ぶ生徒たちは変化しています。楽しく、面白くなければ、意欲を持ち集中してくれません。ときには興味をまったく示さない生徒に興味を持つようにしなければならぬ教師の苦悩は、わかってもらえないでしょう。それでも教師は教材研究をし、ワークシートを作り、準備万端で授業に臨んでいるのです。

ちょっと待ってください。準備するときに生徒の顔を思い浮かべながらしましたか。週2時間しかないで、あれも教えたい、この練習もさせたいと欲張りませんでしたか。教師の熱意はわかりますが、受け入れる生徒たちのことを忘れないでください。学び手である生徒は背伸びをしてくれません。小さな袋しか持っていない生徒なのです。ですから、既習のことを繰り返し練習させ、わかった、覚えた、使えた、という喜びを持たせ、教師が認め、誉めることが大切です。新しいことは少なくし、スモール・ステップで自信を持たせることを工夫してください。

授業の進め方、「授業形態、発問、教材の提示、板書の工夫」だけでなく、シラバスの作成や授業案を立てるときにも「子供の目の高さ」を気にしてください。生徒あつての授業です。教え込むことに夢中になって「子供の目の高さ」を忘れては、効果を上げるための素晴らしいアイデアも価値を失ってしまうでしょう。

3. 「親子共学の勧め」を

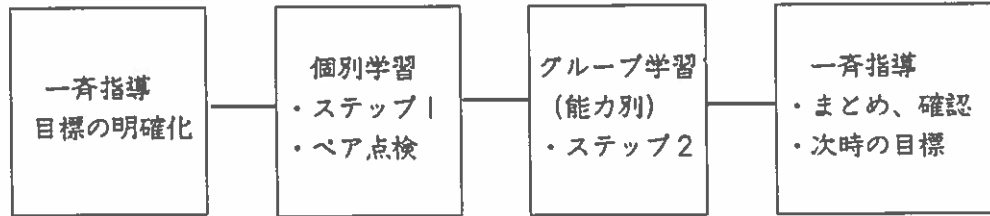
ファンダメンタルのクラスでも、3～4年たつと中だるみ現象が生じてきます。教師の責任ではありません。そこで考えたのが、「子どもを待っている間、日本語を親にも学んでもらったらどうか」と。賛成する親だけ教室に入ってもらいました。いつまでとか、授業料とかは関係なしに始めましたが、子どもの態度が違って来ました。ある親から、「宿題の質問を受けても、日本語はわからないし、どんな方法で勉強しているのかわからないので答えようがなく、困っています。」という相談を受けたのがきっかけです。クラスの人数が少ない方がやりやすいようです。B. C. 州でこの方法をとっている学校が現在4校あります。アグルトを教えるのではなく、あくまで子供を教えるのです。それを親が聴講するというかたちです。うまくいっている事例しか耳に入ってくるのは、教師と親の協力が成功していると言ってよいのではないのでしょうか。教師側からみれば、親の協力を得て授業が進められ、しかも、効果が上がるというわけです。教師が如何に苦心惨澹しているかを分かってもらうことができます。バックグラウンドに日本語のない生徒をどのように指導したらよいか、と悩まなければならない時代の変化にも対応することが求められていますので、一人で悩まないことです。

4. 日本語教育も量より質の時代に

ヘリテージ言語教育も学習者の変化に伴い、クラスの中の能力差が大きくなってきています。2～3のグループに分けられそうな場合、複式授業の手法を取り入れたらどうかと考えがちです。複式授業にも長所と短所があってどのクラスにもあてはまるとは限りません。レベル別の指導計画は立てやすいけれど、直接と間接の渡りがうまくできずに、生徒たちの学習集中度が低くなり、散漫になりやすいようです。また、教師の教材研究、指導資料（副教材）の作成に時間がかかるなどの困難さがあります。

では、能力別の指導法はどうかと考えた場合、まず、どんな観点からグループ分けをするのが問題になります。読みの力か、文字力か、表現力、会話力のいずれを基準にするのか、あいまいな総合力にするのがよいのか。それでいて生徒に優劣感をもたせてはならないとすると、週1～2日の授業がどうなるのでしょうか。日本語学校の場合は、ペア学習、四人ぐらゐの協力グループ等を取り入れ、効率的な授業方法により、学習効果を着実に高めることを考えるべきでしょう。授業を大

事にする展開は、個人差に応じた指導法を取り入れ、一人一人を活躍させることです。



5. 「継承語」としての日本語教育教授法の確立を

家庭で日本語を使用している生徒が多い場合は、今までのように日本の教科書を使い、国語教育的な指導でもよいのですが、どうしても読み書きが中心になり、発音、会話の指導が軽視されます。日本で行なわれている大人・学生対象の外国人向けの日本語教育を取り入れても、あまり期待はできません。場面や環境が違い、用語の変化に対応していないからです。

89年10月「日本語教育の活性化」国際シンポジウムでの中島和子教授のお話のとおり、これからのカナダにおける日本語教育は、異文化の中に入った日本語が消えてしまわないように日系子女に「継承」してもらうために、どのような方法で指導すべきかを研究しなければなりません。実際に日本語教師として授業をしている方々の経験を生かしていくことが大切です。授業の積み重ねから理論を形成していくことが出来るからです。学び手の側に立って、日本語および日本文化に興味と意欲を持って日本語学習を継続するシラバスを系統だて、適切な教材（テキスト）を選び、副教材を作成・整理することに取りかからなければならない時がきています。アイデンティティのシンボルとしての日本語ではなく、「言葉と文化を理解し、そのルールに従って行動し、行動することによってその文化の人と同じ気持ちになるまでが親の願いである。」と中島先生が述べられていることを思い起し、現実と学び手をつなぐ役割が日本語教師の仕事ですので、自信を持って取り組んでいただきたいと思います。

私の実践報告—子供と学ぶ「ある」「いる」

木田 美智子

つくえがある。わたしのつくえ。ぼくのつくえ。
ともだちがいる。わたしたちのくみ。ぼくたちのくみ。

これは、今年、私が使用している光村の教科書一年上「かざぐるま」（昭和60年発行）の単元「ともだち」の一部である。また、この教科書は、私が、十年前、国語教室の教師になって初めて手にした教科書で、とても懐かしいものである。今年、学校の方針で在庫整理をして、この教科書を使うことになった。保護者の方々は、出版年度の古い教科書を使うことに、少々抵抗があったようである。しかし、取り扱っている文法事項や内容などは、かえって昔の方が、カナダの子供達には合っていると思う。今の教科書は、詩などの教材が多く、上記のような「ある」「いる」を取り立てて扱ったものはない。

私は、幸か不幸か十年間、五～六才児を教えている。その間、幾つかこだわり続けている文法事項があるが、今回は、「～がある。」「～がいる。」について述べてみたい。

十年前、私が初めてこの単元を教えた時、どのように教えたら良いのか全く分からず困った。指導書を中心に、フラッシュカードを用意して、パターン練習を中心にしたことをおぼえている。「ある」は物の名前に付き、「いる」は人物や動物に付くと、言う簡単な説明で間に合わせた。新米教師で余裕がなく、何しろ教科書をしっかり教えなくてはと、そればかりであった。二年目に入り、少し余裕が出て来たこともあり、「ある」「いる」は、カナダの子供達にとって取得しにくいと言うことが分かって来た。

三年目は、パターン練習だけでなく、何とか楽しく子供達と学びたいと思った。そこで、アイスクリームの棒に紙を付けて「ある」「いる」の札を作り、私が「いぬ」「えんぴつ」等の名詞を言い、生徒が「ある」「いる」の該当する札を上げるといったゲーム風に教えることにした。札作りは、パターン練習とは切り離れた。まず、黙って二枚の違った色の紙を渡し「ある」「いる」を書かせた。が、子供達は、次に何をするのか分からないので、ゲームをする時になったら、目を輝かせた。余談だが、私は時々何も説明せず、子供達に作業をさせる。これは、意外に効果がある。

何かこの授業の進め方では物足りなく、スランプに陥っていた六年目。日本語教育振興会の夏期研修会で永保先生の講義を聴き、絵を描いて教える方法を知り、直に実行に移したくなった。この永保先生の方法だと、もう少し高度な「ある」「いる」の段階まで教えることが出来る。というのは、花の絵を描き、「花が咲いている」その花を切ったことを説明し、花が挿してある花瓶の絵を描く。「花がある」となる。また、断崖の上の人を描き、「人がいる」上から落ち、死んでいる絵を描く。「死体がある」となる。私の教えている年齢では、ここまでは教える必要が無いかもしれないが、「ある」「いる」の違いは明確になり、今までの教え方にプラスしていったら、もっと良くなるのではと思った。絵を描いて説明するという事は、短時間で描き説明しなければならない。まず自分で絵を描く練習をした。そして、本番。私が黙って絵を描く、子供達の集中度は良く手応えがあった。

しかし、結論に至らず、その後、新しい教え方を模索しながら、札を使ったゲームは10x15cm位の紙にし、○Xの札も作らせた。絵札を袋の中に入れ、一人の生徒がその中から絵札を選んで、皆に見せながら文を言う。例えば、犬の絵だったとする。「犬がいる。」他の生徒達は、○かXの札を掲げるという具合である。○Xの札を使わずアクションでするのも良い。合っている時は、両手を上にあげ円を作り○を表し、間違っている時は、胸の前でXのポーズをする。この方法も他の授業でも使え、子供達のムードを変えるのにも良いと思う。

国語教室は、数年分まとめて教科書を購入するので、その度に教科書が変わる。九年目に入り、教科書が変わり、突然「ある」「いる」の取り扱いが全く無くなってしまった。前年度までは、「～がある。」「～がいる。」と言うはっきりしたものではなかったが、「いる いる しろいうま」と細々と残っていた。いずれにしても「ある」「いる」はどこかで、取り上げなければと思った。

ちょうどこの年、トロントの教育委員会から、The Generic Curriculum for Heritage Language Programs という Cooperative Learning を中心にしたヘリテッジの冊子が発行された。これは、一言では説明できない。が、グループ活動を通して、生徒同志学び合い、もちろん先生からも学ぶといった主旨のものである。初めに、教師は、季節や動物や食べ物などのテーマを考える。次に、どんな文法や言葉を教えるか決め、教える目的も決める。その次は、グループで紙や鉄など色々なものを使うアクティビティを考える。

最後に、生徒に学んだ事の記録を取らせるワークシートなどを用意する。ざっと説明すると簡単に思うかもしれないが、このカリキュラムは、算数なら算数だけというのではなく、教科の枠を外した総合教育で、発展のさせ方によっては、どのようなカリキュラムでも出来る興味深い、また教師の力量も試されるものである。

この本を手にして、教科書とは別なカリキュラムを作ってはどうかと思った。以前から、日本の教科書だけでは、カナダの子供達には、何か教え足りないものがあるのではと、疑問に思っていた。また、四技能をいかに一時間で習得させることが出来るかなどを考えていた時期でもあった。

そこで、食べ物や乗り物など、大体テーマを考えて、一年に振り分けた。「ある」「いる」に関しては、今まで教えて来た方法を全部切り捨てて、もう一度考え直してみた。

教える時、どのような言葉をどのくらい教えることが出来るか考えた。この年齢では、まず身の回りにあるもの。そうすると、食べ物や家具など「ある」を使うものばかりで、「いる」を使うのは、ベット位であった。そこで、「ある」を取り立てて強調して教え、「いる」を何気なく加えて教えたらどうかと言う考えが浮かんだ。

言葉を沢山教えるのには、どうしたら良いか考えた。今までは、主語を与えておいて、「ある」「いる」を選ぶ方法だったが、これには限界がある。そこで、数年前より、動詞を教える時、動詞を与えておいて、主語になる上の名詞を考えさせる方法を取っているのを思い出した。「ある」「いる」を与えておいて、名詞の部分を考えることは、言葉の幅が無限で、絵や言葉を幾つか用意しておいて、その中から好きなものを選ぶことは、子供にとっても学習しやすいし楽しい。今までのプリントは、「ほんが()。」「()がある。」というような「ある」か「いる」を入れるもので、何時ももっと良い方法はないかと思いながら作っていた。が、プリントも「()がある。」に変えることが出来る。何故、今までこんな簡単なことに、自分は気が付かなかったのかと自問した。

「ある」「いる」体で教えるのも良いが、いずれまた、「ます」体で教えなければならない。そこで、最初から「～があります。」「～がいます。」と教えた方が、良いのではないかと思った。

以上のようなことがまとまり、実際にカリキュラム作りを実行した。

まずどんな言葉を教えるかということで、身近なもの、部屋にあるものとした。机、椅子など十の言葉を選んだ。用意した物は、選んだ言葉の絵が描かれている生徒用プリント、それと同じ絵が描かれている教師用絵札。「()があります。」「()と()があります。」「()がいます。」と印刷されている学習用プリント。

授業の進め方は、次のようにした。

(1) 黒板に絵札が全部貼れるような大きさの紙を貼る。若しくは、四角を書く。袋の中に絵札と「ねこ」など「いる」を使う言葉の絵札も幾つか用意し入れておく。生徒を一人ずつ前に出て来させ、袋の中から一枚の絵札を選ばせる。黒板の紙の上に貼る位置を指示する「これは、～です。～があります。」と生徒に言わせながら、所定の位置に貼らせる。この際、上中下左右などをはっきり指示する。

(2) 絵が描かれているプリントを生徒に渡し、切り取らせる。別の用紙も渡す。生徒を二人一組にする。まず一人が切り取った紙の中から好きなものを選び、「～があります。」と言いながら、用紙の上の好きなところに置く、それをもう一人が同じように置く。これを交互にして、互いに同じ部屋を仕上げさせる。

(3) 今度は、自分の好きなように置き換えさせ、糊で貼って、「わたしのへや」「ぼくのへや」を作らせ、それを発表させる。

(4) プリントを使って、書きの練習をさせる。

実際に授業をして、一番良かったことは、子供達が楽しそうに学習していたことだ。まさに、これは完全とは言えないが、Cooperative Learningを取り入れたカリキュラムであると思う。どうしても一時間におさまらず、書きの練習が次の時間に食い込んでしまったことを除いては、ほぼ成功した。「ある」を取り立てたこと、「ある」「いる」を与えておいて、主語の名詞を考えさせたことは、長い間、暗中模索で行って来たが、やっとここに一つの明かりが見えて来たようだ。「ます」体で教えるかどうかは、それぞれの教師の考え方に任せたい。

同じ教材で授業をしても、生徒の人数や能力によっても違ってくる。それに、もっと違った良い方法があるかもしれない。まだまだ、学ぶことは沢山ある。私は、子供達に感謝したい。学んでくれる子供達がいたから、私は色々なことを学び取ることが出来たのである。これからも、子供達と一緒に、楽しく学んでいけたらと思う。

僕、大きくなったら日本語なんかしゃべらない

ウィルソン 夏子

カナダで育っていく子供に、日本語を身につけさせるためには、親は、どんな態度をとったらよいのだろうか。

三歳くらいまでは、親が日本語を使っていれば、子供は、ある程度日本語を理解するようになる。しかし、問題は、その後である。幼稚園へ行きはじめ、テレビを見はじめると、日本語が押し退けられそうになる。

英語圏に住む子供が、継続して日本語を受け入れるかどうかは、何よりも親と子の精神的な関係によるのではないかと、私は思う。

五歳になるヒロシ君は、カナダにきたばかり。エドモントンの幼稚園に行っているが、英語は、まだ良く分からない。

その日、たまたまその幼稚園に自分の子供を入れている日本人主婦のすみれさんが、先生のアシスタントとして、子供たちの世話をしていた。

子供達がおもちゃで遊んだりしているのに、どうもヒロシ君の様子が変だ。

「ヒロシ君、どうしたの？」

落ち着かないヒロシ君をみかねて、すみれさんは聞く。何かためらっているのだが、ヒロシ君は、何も言わない。ここは、母親のカンだ。

「ヒロシ君、トイレに行きたいの？」

すると、ヒロシ君は、こっくりとうなずく。すみれさんは、急いでヒロシ君を、トイレに連れて行った。バスルームに駆け込むところを見ると、ヒロシ君は、かなり長い間トイレに行くのを、我慢していたらしい。

(そんなに行きたかったんだったら、先生に言えばよかったのに、....でもヒロシ君は、まだ英語ができないんだ。それで、もじもじしていたんだわ、....でも、そうだったら、私に言えばよかったのに、....)

すみれさんは、そんな小さいのに、一人で四苦八苦していたヒロシ君に同情していた。

用をすますとヒロシ君は、トイレから出てきた。その時、すみれさんは、「あっ」と言いそうになった。そのはきかけのヒロシ君のパンツを見て、びっくりしたのだ。なんと、ヒロシ君のパンツは、女の子のものだったのだ。

(あら、ヒロシ君、....)

と、すみれさんが思わず声に出しそうになった時、ヒロシ君はこう言った。

「おばちゃん、僕、大きくなったら、絶対日本語なんかしゃべらないよ」

これは、実話である。すみれさんは、私の友人である。このヒロシ君のセリフを聞いて、すみれさんは、「ぞぞっ」と寒気がしたようだ。

五歳児が口にするには、あまりにも強烈な言葉だ。ヒロシ君の母親が、どうしてヒロシ君に、お

姉さんのパンツをはかせたのかは、分からない。

明らかなことは、その時ヒロシ君は、女の子の下着をはかせた母親と、日本語を同一視してしまったのだ。その時点で、ヒロシ君にとって日本語は、自分のはいている女の子のパンツのように、とても恥ずかしい言葉になってしまったのだ。

英語が使えるようになった時には、日本語は捨てようとするヒロシ君の気持ちは、私には、とても、とても分かるような気がする。

母と子の精神的な関係がうまくいっていなければ、母親の言葉を子供に伝承することはほとんど不可能なのだ。

しかし私だって、私と娘の関係が、完璧にうまくいったとは思えない。今十四歳になる娘は、日本語は、聞いてわかるという程度だ。

母親としての私は、娘を日本語と英語のバイリンガルにさせるには失敗したということになる。今、あの時、ああやっていれば良かったと、後悔することがいくつかある。

娘が、私の日本語の問いに英語で答えるようになった時に、忠告を息ったことを、私は特に後悔している。あの時、

「大変でも、日本語で言ってみるようにしたら。後できっといいことがあるから」
とても言い、それを納得させれば良かったと、つくづく思う。娘は、それ以後ずっと、日本語の問いに、「正々堂々と」英語で答えるようになってしまったからだ。

しかし、後悔しても仕方がない。彼女は、もう反発精神旺盛な十代の半ばだ。今は、親としてほんの少しの手助けができるだけだ。

具体的には、高校の外国語教科で、スペイン語を取りたいと言えば、「それもいいわね」と言うつもりだ。日本語をおしつけないようにしたい。色々の言語を知ってから、日本語に戻ってもいいと思うからだ。

母国語は、誰も選べない。私は、自分の母国語が日本語であったことを、すばらしい天からの贈り物と思っている。娘は、自分の母国語が英語であったことを、この上なく幸運に思っているらしい。

母国語がなんであれ、ヒロシ君の母親のように、子供に芽生えている日本語の芽をつぶしてしまわないことだ。

大切なことは、子供の日本語への興味を湧かせ、それを継続させることだろう。それができれば、たとえ英語圏に住んでいたとしても、子供たちは、ごく自然に「日本語列車」のレールに乗るだろう。

新幹線で行くか、鈍行で行くかは、その子供次第だ。

カナダにおける日本語教科書作成の沿革

横山 赴夫

カナダにおいて日本語学校が設立されたのは1906年のことで、BC州バンクーバー市に「バンクーバー日本語学校」が設立された。これが一番最初の日本語教育施設機関である。それから現在まで約90年を経ているが、その間カナダにおいては、日本語の教科書が一度も作成されたことがなかった。ところが、実は故佐藤伝氏（元バンクーバー日本語学校長）が日本語教科書を作成されていたことが後になってわかった。同氏はその原稿を印刷するため日本へ行かれたが、不幸にして第二次世界大戦が勃発し、急速最後の客船でカナダに帰ってこられた。その後、その計画は戦争のため日の目を見るに至らなかった。1978年、当時バンクーバー日本国総領事館で筆頭領事としておられた川本開作氏からの発題によってカナダにおける日本語の教科書作成を発足することとなり、爾来横山赴夫を作成委員長として一巻から七巻までの予定表に従って作成されてきている。

各語学校は依然として日本政府文部省検定教科書を使用しているが、カナダ生まれの二、三、四世には使用上の無理があり、どうしても現地で教科書を作成する必要性が生じたのである。

本教科書は、二つの主なグラントによって作成されている。大別するとカナダおよび日本の両政府ということになるが、細かく分類すると前者はカナダ連邦政府（デパートメント・オブ・カナディアン・ヘリテージ省ヘリテージ文化・言語局）、後者は国際交流基金である。作成の開始は、国際交流基金へのグラントの申請締め切りが12月1日であるためこの日を基準にして、ついでカナダ政府への申請という順になっている。

カナダ連邦政府の資金援助は、全プログラムの1/2であり、国際交流基金の資金援助は、全プログラムの1/4である。さらに、教科書作成のペースは1年に一巻の割りである。したがって、1年ごとに申請をしていくことになる。

このプログラムは、発行部数1,000部、指導書100部が含まれており、教科書と教師用指導書とを同時に発行しなければならないことになっている。ところが、カナダ政府は、全プログラムを調査研究と印刷出版の二つに分類して、印刷出版ばかりでなく調査研究においてもグラントを下付してくださることが分かり、「日本語4年、5年、6年」では、調査研究に対するグラントをもらった。日本語7年もグラントをもらう考えである。

編集委員会

委員長	横山赴夫	リッチモンド日本語学院長
監修	曾我松男	BC大学名誉教授、現南山大学教授（名古屋） 同教授には、粗原稿の文体、文型、文法、英語への翻訳の修正など。
	高嶋健一	BC大学教授 同教授には、原稿ができた時点で全体の監修。
編集主任	横山赴夫	対外的な手続きの一切。両政府へのグラントの申請、粗原稿の修正、出来上がった原稿を両政府に提出、タイプセッティングとレイアウトされてきた原稿の校正、印刷会社との折衝、注文に応じ各地に発送。
委員	館野道子	コクイトラム日本語学校長 粗原稿の修正及び指導書の表現練習。

トルーデル嘉津子	UBC日本語講師、サレー日本語学校長 粗原稿の修正及び指導書の文型、文法。
間庭文子	フレーザーバレー日本語学校長 粗原稿の修正及び本文の新出漢字、読み替え漢字、新出語のまとめ。
森河内靖子	キラニー日本語学校長 粗原稿の修正並びに言葉の意味及び本文の和英対象の英語への全訳。
横山穂子	リッチモンド日本語学院主任 粗原稿の作成。イラスト及び指導書のまとめとワープロ印刷。

教科書の作成に当たって、日本語教科書作成委員会は、まず、一巻から七巻までの作成計画を立案した。この計画は大別して次の三部門に分けることができる。すなわち、

- 1 教科書に入れたい文の内訳
- 2 一巻から七巻までの学習漢字
 - (1) 読める漢字
 - (2) 読み・書きのできる漢字
- 3 児童用教科書と教師用指導書の作成
一巻に限り、「ひらがな」の単語帳「ことばのおけいこ」を作成した。

1 教科書に入れたい文の内訳

別表で示したように一巻から四巻までは、「生活文」が圧倒的に多く、五巻と六巻ではわづか一文づつとなり、七巻においては皆無となっている。同じく一巻と二巻では「練習文」が三文ずつ出てくるが、三巻以上は皆無である。その代わりに「日記文」「伝記文」「紀行文」「紹介文」「物語」「観察文」が平均して一文ずつ出てくるようになっているが、これは、生徒の語学習得の過程を良く吟味、検討した上での文の配合である。

次に、文の表題を見ると、日本の内容とカナダ的内容が半分ずつ出てくることに気付くであろう。これは、カナダ当局の意向ではあるが、対象をカナダ生まれの小学生向きにしてあるからである。しかも広いカナダを東から西へ、北から南へとどちらにも片寄らないようにしてあるが、これは全加的な教科書にしようとする意図からである。例えば、カナダの東部に関わりのある文としては、「赤毛のアン」「ケベックを訪ねて」等を挙げることができる。「サマーキャンプ」（これは、アルバータ州の日系人の子供が両親といっしょに夏B.C.州にきて、初めて海を見る話）、「おじさんのりんご園」（BC州オカナガン地方のりんご園の物語）、「トーテン・ポールの話」「カナディアン・ロッキー」等はむしろカナダ西部に関係した文である。「イヌイットの生活」はカナダの北部に関した文であり、「カナダの大平原」はカナダの中央にある平原州に関する文として入れてある。その他、カナダ全体に関わる文としては、「建国の父ジョン・マクドナルド」「希望のマラソン＝テリー・フォックス」（彼はBC州の出身ではあるが、ニューファンドランド州のセント・ジョーンズからマラソンをスタートしている）、「ビーバーの生活」等を挙げることができる。

さらに、日本の物語としては、「浦島太郎」「かもとりごんべえ」「竹取物語（かぐや姫）」があるが、ヨーロッパのものとしては「アンネの日記」があり、「くじゃくのじまん」「りょうしとこや」「一びきたりない」などは、童話である。

「明治維新」は日本の歴史を教え、「ケベックを訪ねて」「カナダの大平原」などはカナダの地理を教えようとしての意図である。

「生きていたタロとジロ」は南極物語で、元第一次南極調査隊の隊員で、犬ぞり係りでもあった菊池徹博士に執筆してもらった。

「日本語の文字」「日本語と敬語」等は、日本語の持つ特徴について教えるものであり「手紙の書き方」「お礼の手紙」「見まいの手紙」「招待文とその返事」等は、手紙の書き方を教えるものである。

この他、「俳句と短歌」が入れているが、五七五と五七五七七で綴る古来から日本にある独特な文学について触れさせようとするものであり、今や、英語圏でも俳句、短歌等が喧伝（けんてん）されている。

「あげるといただく」は、カリフォルニア州共同システム発行の日本語教科書五年生に出てくるものであるが、大切な表現を教えており、既に転載の許可を得ており、「アンネの日記」は日記を掲載するのであるから、訳本の発行社である文春文庫に問い合わせたところ原作者の許可も必要とするので、その方の許可手続を依頼している。

日本とカナダの行事としては、「お正月」（一月）、「たこあげ」（一月か二月）、「ひなまつり」（三月）、「イースター」（主として三月）、「わたしのプレゼント」（母の日五月）、「サマーキャンプ」（七月か八月）、「ハロウィーン」（十月）、「クリスマス」（十二月）等を交互におり混ぜて出すことにした。ただし、カナダでは新学期が9月から始まるので、授業の進度表を作って、時期と表題がマッチするよう工夫してある。

「えんどうのかんさつ日記」「ベット」「鳥の巣箱」「ビーバーの生活」「さけの一生」は、野生動物や植物に関する観察文として出したわけであるが、「日系パイオニア＝永野萬蔵」は、カナダにおける日系人史の原点にかえることを意図したものである。「太平洋のかけ橋＝新渡部稲蔵」は、明治の国際人として活躍した彼の伝記を学ぶことにある。

2 一巻から七巻までの学習漢字数

教科書作成に当たって必ず問題となるものに漢字の指導がある。先ず我々は、日本の国語教科書における漢字教育の実態を知るために、あらゆる種類の教科書を揃え、次いで海外における日本語の教科書を参考資料としてできるだけ多く求めるよう努力した。そして入手したのは、ハワイ、カリフォルニア共同システム、ブラジル及びオーストラリアで作成されたものを一応全部揃えることができた。

まず、日本では、終戦直後の昭和二十一年に、1,850字の「当用漢字表」が作られている。義務教育というのは、小学校六年間と中学三年間を合わせた計九年間であるがこの九年間のうち、小学校881字、中学校969字の漢字を習得することになっていた。しかし、最近では中学一年で教える115字を負担が重すぎるとして小学校へ移したため小学校六年間に996字を習得しなければならなくなっている。そして、その996字には、学年別配当表ができていて、それは次のとおりになっている。

一年46字、二年105字、三年187字、四年205字、五年194字、六年144字。それに六年生については、中学一年から移った115字（備考漢字）が加えられることになったのである。

当初は、漢字の読み（音読と訓読みとがある）と書きとを同時に習得させることができると考えていたが、実際に当たってみると読みの習得率が書きの習得率よりも良いことがわかり、もし読みだけを教えるならば、そのすぐ上の学年から選定された字を借りてくることができるようになっていく。その借りられる字には、「学年別配当表」にアスタリスク（*）が付いていて、それらの字を読みだけ教えるようになっている。

例えば、一学年では46字を読み書きできるようにならなくてはならないが、さらに、二学年から30字借りてきて読みだけ習うようになっている。二学年では三学年から70字、三学年では、

四学年から78字、四学年では五学年から68字、五学年では六学年から69字、六学年では、中一から115字借りてきてこれは読めさえすればよいことになっているのである。

これを海外における日本語の教科書でみると、ハワイの教科書は、日本の国語教科書と同様に、一年から六年まで上下二冊づつとなっている。ところが、一年と二年では、漢字は一字も教えていない。三年生の上になって初めて漢字が出てくる。それゆえ初等科六年までに習う漢字数は、284字である。

次いで、カリフォルニア共同システムの教科書は入門から始まって六年生までとなっており、入門では「かたかな」を教え「ひらがな」は一年生から出てくる。習得漢字総数は604字であって、これは、日本の国語教科書の学年別漢字配当表の一年生から四年生までの配当数(611)に近似している。つまり、日本の児童が一年生から四年生までに習得する漢字を六年間で習得させようとするものである。

ブラジルにおける教科書は、土地柄からいって非常に日本的であり、全日制の学校が大半と聞いているので、日本語教科書の内容が非常に高度である。初等科が八年となっていてこの間に習得しなくてはならない漢字が850字である。

オーストラリアの教科書は、最初からローマ字で書かれていて、「読み」や「書く」ことよりも「話す」ことに重点が置かれているようである。従って漢字数はそれほど多くない。

以上述べたことを土台にしてカナダで作られる日本語の教科書では、読める漢字と読み書きのできる漢字を一巻から七巻までの間で、それぞれ757字及び550字と定めた。

3 児童用教科書と教師用指導書の作成

どんなに良い教科書を作っても、その著者の意図を正しく把握しない限り、その教科書は教育の効果を挙げるものとはならない。著者の意図を正しく伝えるためには、教師用指導書の同時作成が是非とも必要になってくる。それ故、教科書とともに教師用指導書の作成が行なわれてきた。

この教師用指導書の中には、先ず単元の主旨と指導要項が記されている。新出文字、新出漢字、文型、類似語、反対語、応用例等が詳細に書かれているが、応用例等は、あくまで任意な示唆に過ぎないので、教師各自が自由に取捨選択してさしつかえないようになっている。

児童用教科書の巻末に「日本語と英語」の対訳が記されており、低学年では「日本の子どもの歌」*が数曲入れている。

一巻で特別に作成されている「ひらがな」の単語帳「ことばのおけいこ」は、本文にでてこないことばを吟味して入れた。これは、語彙(ごい)のかずをできるだけ増やすことを意図しており、もう一つの特徴としては、普通五十音を習う時、ほとんどといっていいほど「あ」からスタートする。しかし、この「あ」は形の取り方が非常にむずかしい。そこで、字画の少ない「し」から始め新出文字と既習文字を組合せてことばを作り出して習得するように工夫した。

* 一巻から五巻までに付録として「日本の子どもの歌」が委員により選出され、掲載されている。これらの歌に関しては、日本音楽著作権協会より、許諾番号を取得した。

「にっぽんご一年」 9393011-301

「にっぽんご二年」 9393012-301

「日本語四年」 9393013-301

「日本語五年」 9393014-301

「日本語三年」はすべての歌の作詞・作曲の著作権が消滅しているので、番号なしで掲載することができた。

教科書にいたい文の内容 (漢字数757字)

単元数	25	18	11	10	9	7	7
漢字数	10	59	129	199	127	73	160
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年
生活文 行事を 含む	がっこう・あい さつ・なまえ・ わたしのせんせい・ かぞく・たべもの・ いえ・なわとびとかく れんぼ・ごはん	あさ・ゆき わたしたちの生 活・ひなまつり・ ハロウーン・た こあげ・イース ター・クリスマ ス	お正月 わたしのプレ ゼント (母の 日) ベット	おじさんの りんご園	鳥の巣箱	イヌイットの生 活	
説明文	いろ・きりん・ かお	一しゅうかん		トーテンボー ルの話 マラソンの起 こり	日本語の文字	あげるといた だく	日本語と敬語
童話		くじゃくのじま ん	浦島太郎	かもとりごん べえ	竹取物語 (かぐやひめ)		
対話文	みせ		わたしは何で しょう				
日記文	えにっき	したことをかき ましょう	日記を書きま しょう	冬休みの日記			アンネの日記
手紙文			手紙の書き方	お礼の手紙	見舞いの手紙	招待文とその返 事	
詩・歌	そら・けしき	あり	春	ナザラン	風	俳句と短歌	心に太陽を持て
伝記文					建国の父ジョン・ マクドナルド	太平洋のかけ橋 (新渡戸稲造)	日系パイオニ ア (永野萬蔵)
紀行文	こうえん・どうぶつ えん・ゆうえんち		サマー・キャ ンプ		カナディアン・ ロッキー	ケベックを訪ね て	
紹介文				日本		明治維新 (歴史)	カナダの大平原
物語	まほうつかい	一びきたりない		赤毛のアン	希望のマラソ ン		生きていた「タ ロ」と「ジロ」
観察文			えんどうのか んさつ日記		ビーバーの 生活		さけの一生
作文	さくぶん		はじめての作文				
練習文	ことば・あいう えお・かず	ことばつなぎ カレンダーづくり 文のれんしゅう		こ・そ・あ・ ど			

継承語教育に役立つ市販教材について（私見）

高橋 和比古

1. 主教材

主教材を考える時にまず頭に浮かぶのは日本の国語教科書だと思う。継承語教育で国語教科書を使用する際の問題点は以下のようにまとめられる。

- 1冊を半年なり1年なりで終わらせるように作られているために、週に一回程度の教室では全てをこなせない。生徒の年齢が上がるとともに、使用中の教科書の対象年齢との差がひろがる。
- 内容に日本文化的、社会的なものが入ってくると、生徒が理解できない、先生にとっては説明しきれないことになり、生徒の興味を持続させるのに苦勞する。

一方、長所としては、

- 内容にすぐれたものが多い。この点安心できる。
- 安い。
- 生徒の「実力」を日本の尺度で測れる。

上記の「欠点」を補い、主教材として勧められるものは残念ながらあまりない。しいてあげれば以下のようになるが、採用の前には十分検討することが肝要である。

- ひろこさんのたのしいにほんご 1・2（凡人社）
9歳の女の子ひろこさんの生活を通して、日本の生活・習慣が自然に学べる。テキストはイラストも豊富で親しみやすく、充実した副教材（ひらがな・かたかな・かんじ練習帳、ぶんけい練習帳、絵カード）が魅力である。教師用指導書もあり。
- にほんごをまなぼう（ぎょうせい）
海外からの帰国子女など日本の学校生活や日常生活に早くなじめるよう会話の習得を中心とした内容。日本の文部省が作成した児童・生徒向けの唯一の日本語教材。教師用指導書もあり。

2. ゲーム教材

楽しいクラス作りにはゲームが欠かせない。以下に掲げるのは海外での日本語学習者（成人）のために開発された物であるが、継承語教育にも十分使えると思われる。

- 初級日本語・ドリルとしてのゲーム教材50（アルク）
- 日本語コミュニケーション・ゲーム80（ジャパンタイムス）
- 絵とタスクで学ぶ日本語（凡人社）
- クラス活動集101（スリーエーネットワーク）
- 日本語かるた（凡人社）
- すごろくゲーム日本語探検（凡人社）などである。

特に子供向けに作られた教材としては、

- ことばあそびをしよう（さ・え・ら書房）

- ことば遊び、五十の授業 (太郎次郎社)
- ひらがなあそびの授業 (太郎次郎社) などがあげられる。

3. 文字指導

文字指導についても海外の日本語学習者向けの教材が継承語教育でも役立つと思われる。以下の教材はかなの指導用であるが、いずれもかな文字を絵にあてはめて覚えやすくしたものである。

- おもしろいひらがな、おもしろいかたかな (アプリコット)
- ひらがながんばって、カタカナがんばって (講談社インターナショナル)
- 絵で覚えるひらがな・カタカナ (ジャパンタイムス)
- HIRAGANA IN 48 MINUTES, KATAKANA IN 48 MINUTES (Curriculum Corp.)

漢字指導のための教科書には、特に子供向けには作られていないが、

- Basic Kanji Book 1,2 (凡人社) がある。内容からして継承語教育にも使えるものと思う。教科書で漢字を教えるよりもゲームで、という希望には、馬場雄二の
- 文字遊びシリーズ (奥野かるた店) が充実しているので見てみることをお勧めする。

4. 読み教材

日本の児童図書が使えると思うが、いわゆる「昔話」よりも西洋の古典と言われるような(例えば、トムソーヤーの冒険、宝島、等)もののほうがこちらで育った子供にはわかりやすいだろう。

5. 紙芝居

紙芝居はそのスタイルからして、こちらの子供たちにも受けがいいようだ。しかし読み手に多少の練習が必要なことが多い。生徒のなかから読み手を選ぶのもいい方法であるが、十分に準備の時間を与える事。童心社という出版社から数百種発売されているので、カタログをみて注文するのがいい。選択の際の注意点は読み教材と同じ。

6. コンピューター・ソフト

IBM compatible, Macintosh を問わず、数が増えつつあり、選択の余地がでてきた。たとえば、Kana-kun、Kantaro (Pacific Software Publisher)などは子供の文字学習にも使える。ただし、教室という環境で使うには考えねばならない点も多い。家庭での学習用として父兄に紹介するには問題がないと思われる。

7. その他

市販教材というわけではないが、漫画やアニメは子供の受けがいいので取り入れない手はない。教科書では学べない「日常の日本語」を学ぶこともできる。ただし注意する点は、

- タイトルなどから子供向けに見えても、必ず事前に内容をチェックすること。日本のこの種の物は子供向けと成人向けの境があいまいである。主人公が子どもでも内容は大人向きということもある。
- 漫画は漢字にふりがながついているもののほうが読み続けられるようだ。四コマ漫画(サザエさん、コボちゃん、等)は読む部分は少なく、絵で理解できる部分が多いので、見せ

てから日本語で内容を説明させるなどの使い方ができる。

- 幼児向けの番組（「お母さんといっしょ」など）を日本から送ってもらって見せるアイデアもあるが、テレビの視聴は受け身的な学習方法なので、ただ見せて終わりにするのではなく、上手に使う工夫といったものが必要であろう。その他、いわゆる「生教材（例：新聞、折り込み広告、パンフレット）」はインパクトが強く、できるだけ使ったらいいと思うが、いいものを手に入れにくいのと、使うための準備に時間がかかることが多いのが短所である。